

近代京都における建築の 継承と復古

—京都府近代和風建築総合調査から—

文化遺産部建造物研究室では、平成19・20年度の2カ年にわたり、京都府内に残る近代和風建築の調査を、京都府からの受託調査事業として実施した。受託内容は、京都近郊4大学による府全域の一次悉皆調査を経て200件強に絞り込まれた重要物件を対象とする、二次詳細調査である。京都における近代和風建築は、質・量ともに東京と双璧をなす充実ぶりをみせており、特に伝統に軸足を置いた和風建築の継承と創造という点においては、全国的視野からみても突出している。本稿では、調査を実施するなかで明らかとなってきた、近代京都における和風建築を、主にその背景との関係から概観しておきたい。

「近代和風建築」とということば

「近代和風建築」とということばが指し示す像は、地域や立場によって区々である。よく取り上げられる近代和風建築の事例といえば、派手な折衷や部分の肥大したアクリの強い造形、あるいは建築家による和風表現といった、造形的に目を引くものが主であるが、京都に残る近代和風建築は少し毛色が異なっている。

「近代和風建築」とということばのうち、「和風」の語は、「洋風」と対になるものであるから、それだけで洋風が意識化された時代、すなわち近代を含み込んでいる。その語にさらに「近代」の語を付加した「近代和風」という語は、同語反復であり、意味が過剰である。近代和風建築の代表例として先に挙げた類のものが注目されてきたことは、こうした用語設定を素直に反映している。

本調査で明らかとなった京都に残る近代和風建築の数々は、こうした見方に対する強力なアンチテーゼとなる。その多くが施主と大工の協同による建築であり、建築家が関与した建造物は必ずしも主役ではない。その造形と技術は近世以来の伝統を正統に「継承」した、いくぶん地味なものであり、華々しい造形に彩られているわけでもない。けれども、近世とはどこか異なる造形や、その完成度、洗練具合は、確実にその空間を体験する者の心を打つ。他方、建築家の設計による和風建築は、京都では近世より前の時代への「復古」の意識が強く見られるもので、近世までの造形を刷新する新たな表現を見せた。とはいえそれらも、近世以来の大工の技術的伝統、

あるいは現存する歴史的建造物との深い対話の上に、造形が試みられている。京都の近代和風建築は、これら「継承」と「復古」の2つの概念を揺れ動きながら形をなしたものであった。

大工による「継承」の中の個性

京都府の近代和風建築では、大工の設計施工による建築の比重が特に高いことが、本調査において再確認された。大工の設計施工による建造物は、近世の造形・技術の「継承」を前提とする。こうした造形・技術は、いわば読み人知らずのデザインとして、時代性、地域性において一般化されて読まれる傾向にあった。しかし、建築が規制や規範に強く縛られていた近世以前とは異なり、施主の趣味がより直截に建築に込められるようになった近代の和風建築においては、大工の個性がその造形に現れやすくなつたことが、京都においては明確に認められる。

本調査では、大工の個性を、次のような点に見いだし、個々の建造物を評価した。まず、ゆるぎない比例と近世初頭の洗練された意匠のうつしによる、上質な空間の形成である。ここには、茶室を専門とする数寄屋大工の造形感覚が、施主となる近代数寄者の美意識と混じり合い、邸宅から町家へと徐々に浸透していく過程がみられた。そして、見え隠れにおける構造技術的創意による表現の自律が挙げられる。例えば、対龍山荘（京都市左京区、明治38年）や角屋松の間（京都市下京区、大正15年、図11）では、驚くほど深い軒が差し出されながら、軒桁が支持柱なく宙を浮いている。側柱を徹底して抜きながら、軽やかな外観を保つため、見え隠れに技術的創意が重ねられる。これは、南禅寺旧境内に代表される別荘地開発等により、建築を庭と一体として造形する感覚が磨かれ、特に室内と庭との連続を求める意識がもたらした結果であった。また、大正から昭和にかけては、建築家との共同を経て、復古様式や洋風技術・意匠を大工が吸収し、血肉化していく過程も認められた。これは宗教建築に顕著であるが、住宅においても大工と建築家の技術と美意識が交差していく様が見て取れる。

建築家による「復古」を支えるもの

近代になって新たに成立する職能である建築家によって設計された建築においても、京都では和風建築が優勢であり、明治28年竣工の平安神宮（木子清敬、伊東忠太設計）を筆頭に、その表現は全国における建築家による和

風建築の先陣を切り、かつ積極的に牽引する役割を担った。和風表現は、主に宗教建築、公共建築において先行し、遅れて住宅建築でもみられるようになっていく。

その造形的特徴は、古建築の形式を引用、模倣、折衷し、新たな造形へと昇華させる復古様式に代表される。復古様式は、明治30年より開始された古社寺保存法による古社寺修理によって、体系化されていく。京都府は奈良県とともに、その起点をなし、古社寺修理の監督技師を務めた建築家により、古代、中世、あるいは桃山期の意匠を再現する復古様式の建築が生み出されていった。

復古を超えて、新しい意匠の創造に踏み込んだのが、京都府技師亀岡末吉である。「亀岡式」と称されるようになるその作風は、建築の概形は古建築から引用しつつ、欄間等を埋める彫刻に、伝統意匠を西洋図案により抽象化、変形したもので置き換えるものであった（図12）。その作風は、古社寺修理技術者や内務省を経て、全国に流布していく。

建築家による和風表現は、西洋由来の歴史主義建築觀に基づき、古建築を様式化するもので、いわば和の皮を借りた洋である。しかしながら、構造に目を向けると、トラスという新構造を小屋組に大胆に挿入してはいるものの、全体としては建登せ柱を有効に利用した近世式であり、その保証があつてはじめて、復古意匠が十全に展開し得たのだった。その意味で、復古様式も近世に完成された造形・技術の延長上に成り立つものであった。

和風建築からみた近代京都

京都の近代和風建築には、建築類型の差異を越えて、ある種の共通感覚が認められる。その共通性を生んだ近代京都の社会的背景としてまず挙げられるのが、茶の文化（煎茶、抹茶）の隆盛と、それに関連する装飾文化の開花である。京都における別荘の隆盛をはじめとする住宅建築の意匠的洗練は、茶道の中心地としての伝統と技術、美意識の集約が預かるところ大であった。また、復古への希求も、その対象となる時代をよく見てみると、平安、室町、桃山時代を中心となっていることに気付かされる。これらを一言で言い換えるならば、明治維新後、相対的地盤沈下をおこした都市京都の再浮上を意識したものといえよう。

こうした目で近代京都の和風建築を見直してみると、伝統を素直に継承しているかに見える造形であっても、

リヴァイヴァルとまではいかないけれども、部分的ながら意識的な復古と再解釈を含んだ造形がそこかしこにみつかるのである。近代和風建築は、この「継承」と「復古」の狭間にあるような試みの中に、その本質を有するものであるとの見方が、ここから引き出されよう。

京都の近代和風建築は、同時代の洋風建築や近代主義建築、あるいは派手な折衷による和風建築に比すれば、保守的な造形をまとう。しかし、そこには伝統的な技術・造形を正統に継承しながら、気付きにくいけれども要所を押さえた復古的意匠を挟み込み、近代に相応しい和風建築が確かに生み出されている。それは、伝統的な技術と造形が、近代という時代においても刷新と展開を生むものであり、汲めども尽きぬ創造の源泉であり続けることを、今日の我々の眼前に突きつけてくるのである。

（清水重敦）



図11 宙を浮く軒桁（角屋松の間、京都市、大正15年）



図12 亀岡末吉による復古様式（仁和寺宸殿、京都市、大正3年）